

スイスでの留学体験記

—留学までの道のりと現地での生活—

スイス連邦工科大学チューリッヒ校博士課程 久野 遼平

Ryohei Hisano

留学を思い立つまで

「スイスに留学すれば良いんじゃない？」

まだ一橋大学大学院に在籍していたある日、研究室で指導教官とミーティングをしていた際に言われた言葉である。留学と言えばアメリカやイギリスというイメージが私は強かったので、かなり面喰ったことを今でも記憶している。現在、スイス連邦工科大学チューリッヒ校（ETH Zürich）に留学しているのはこの時の一言が関係しているのであるが、この一言が出た背景を紹介するには、私がまだ日本で暮らしていた際に何をしていたのかを少し説明する必要がある。

私は元々経済学科の学生であった。学部も経済学部であったし修士課程も経済学研究科に所属していた。元々数学が好きだったこともあって学部生の頃は経済理論や数量的手法の勉強を積み重ねていた。そして修士課程に上がる頃にはそれなりに自分の知識に自信を持てるようになり、漠然とではあったが研究者になりたいという気持ちも強まってきていた。ただ、多くの学生がそうであるように私も「研究テーマ」という壁にぶつかった。要するに何となく研究者になりたいという気持ちはあったものの、自分が真に情熱をもって心血を注げる研究対象がいまいち何なのかははっきりしなかったのである。そんな折、近年社会科学の世界では分析対象となっているデータが量・質ともに急激に変化してきており、そうした新しいデータを用いたユニークな研究が学科間の垣根を乗り越え盛んに行われるようになってきていることを知った。さらに、私にとっては幸運なことにそうした研究を専門にしている若い先生が大学内にいることも知った。元々理論や数量的手法に関心が深かった私はすぐさまその先生の研究室の扉を叩き、その先生との共同研究を開始するに至ったのである。

修士課程の頃の研究は刺激に溢れたものであった。指導教官がまだ赴任してきたばかりの若い先生であったことも幸いして、1~2週間に一度の頻度でマンツーマンのミーティングを重ねることが出来た。ミーティングでは従来の社会科学の枠組みに囚われない新しい理論や手法を毎回教わり研究の方向性についても活発に議論しあった。そのように充実した研究生活を送っているうちに、漠然と研究者になりたいと思っていた気持ちも次第に本当にやってやろうという固い決意に切り替わってきた。そして自分の決意がゆるぎないものになった頃、私は先生に進路相談をした。先生は「自分はまだ若いので博士後期の学生をとることは難しい」と説明した上で、スイスにいる現指導教官の名前を口にし、スイス連邦工科大学チューリッヒ校に留学することを勧めてくれた。冒頭のセリフはその時に出た言葉である。私も何度も論文を通じてその名前を見かけたことがあったし、その先生が出版した本も好んで良く読んでいた。私は博士後期課程から環境を変える事に多少の不安は覚えつつも、留学は新たな研究手法に触れコネクションを広げる良い機会になるのではないかと思い、スイス留学を決意したのである。

留学決定までの長い道のり

スイスと言っても最初は何もわからなかった。使用言語すら良くわかっていなかったし、ましてや大学のシステムがどうなっているのかなんて皆目見当がつかなかった。調べていく内にスイスの博士後期課程はアメリカやイギリスのようなコースワークと論文執筆が1セットになっているプログラム型ではなく、日本の博士後期課程に近いということがわかってきた。要するに博士後期課程の学生は本人の興味を除けば講義を受ける必要はほぼなく、論文執筆のみに集中出来るということである。また、日本の博士後期課程と違ってスイス連邦工科大学は入学するタイミングが春や秋と限定されているわけではなく、日本のような「入試」というシステムもないので、教授の一存さえあればいつでも博士後期課程の学生として在学を開始できることも知った。つまり、私のように師事したい教授がはっきりわかっていた候補者にとっては後は教授の許可さえ下りれば良かったのである。そこで私はすぐさま現指導教官にコンタクトをとった。ちょうど修士課程の1年目が終わる頃であった。日本で当時開催された大きな国際会議に現指導教官が出席することも聞いていたので、直接会って自分の研究内容を聞いてもらうことにした。その後も頻りにメールでやりとりをしたり、もう一度直接会って自分の熱意を伝えるためにわざわざイタリアで開催された国際会議にまで遠征し研究発表をしたりもした。そうした努力が実ったのか「自分のグループは財政的に厳しいのだけど、奨学金が取れるなら是非一緒に仕事をしよう」と約束を取り付けることが出来た。元々奨学金の可能性も考慮に入れて予定を立てていたもので、私は自分の知ってる限り全ての奨学金に応募し、必死で自分の研究テーマの内容と重要性についてアピールした。その中の一つが日本学生支援機構（JASSO）で募集していた留学生交流支援制度（長期派遣）であった。そして選考の結果、無事「合格」をもらい正式に留学することが決定したのである。

こうして書き出してみると比較的すんなり決まったようにも見えるが、留学が決定するまでの1年間は、元々「ゼロ」からの関係づくりだったこともあり、正直必死だったし苦勞の連続でもあった。送ったメールが返ってこなくて気落ちすることもあったし、研究が暗礁に乗り上げたことだってあった。それでも最後まで諦めずに頑張れたのは一橋大学大学院の先生方や家族・友人の支えがあったからだと思う。そうした方々にはこうした稀有な機会を与えてくれたことに感謝するとともに優れた研究成果を残す形で今後恩返ししていきたいと思う。

スイスに到着

スイスに到着したのは2010年6月中旬のことだった。空港に到着したのが夜だったのでその日はホテルに直行し、翌日新しい指導教官と最初のミーティングをしに研究室に向かった。研究室に向かうまでは本当に受入れてもらえているのだろうかと多少の不安もあったが、ミーティングで議論をしている内に次第に緊張もほぐれてきた。ミーティング後は教授に連れられメンバー一人一人に挨拶して回り、自分がこれから使うオフィスも案内してもらった。驚いたのはメンバーの国際色の豊かさ（ざっと13カ国以上いる）と研究室の広さである。スイスは諸外国に比べ学術に対する投資の規模が大きく研究施設も充実しているので、世界中から学生を引き付けていると聞いてはいたが、こんなに目に見えて違うものかと正直驚かされた。ちなみにスイスはアメリカやイギリスそして日本に比べて学費も極めて安い。それも海外から多くの学生を

牽引出来る理由の一つなのだろう。一通りメンバー全員に挨拶した後は、教授と別れアパートの鍵をもらいに大学の事務室に向かった。事前に大学の事務室と話を付けて最初の3カ月間は大学の保有するアパートを借りる約束をしていたのである。後々わかったことなのだが、留学生にとってチューリッヒで住居を探すのは一般的に非常に難しいとされている。物価全般が高く家賃も高いこともあるが、そもそも学生が住めるような住居の数が少ないのである。大学が博士後期課程の学生のために保有しているアパートの数も驚くほど少ないし（10室程度）、物件情報がドイツ語のみで書いてあることもざらなので、私のような英語しか話せないものはその時点でハンディキャップがあった。だから博士後期課程の学生やポスドク研究員が住居難民になるのは日常茶飯事だった。実際、グループ内でも新しい人が来たら住居探しを手伝ってあげるのが習わしであるし、その助力も実らず結局最初の2、3カ月間まともに研究出来なくなってしまいう人もざらにいる。その点私は幸運だった。大学がわずかしか保有していない短期のアパートも事前にとれたし、周囲の助力もあってか最初の3カ月の間に無事リーズナブルな部屋を見つけることが出来たからである。おそらく留学したタイミングがちょうど春学期が終わる頃だったのも幸いしたのであろう。住居探しにさほど時間を取られなかった私は最初の1年間全力で研究に集中することが出来た。そのおかげでこっちに来てから取組み出した研究も1年以内に論文として完成させることが出来た。新しい指導教官と良好な関係を築く上で最初の1年間は極めて重要だと思うので、本当に自分は幸運だったと思う。

今後チューリッヒに留学する人に一つ助言だが、住居探しは本当になめない方がいい。住居探しに時間を取られすぎたせいで研究成果をうまく残せなかったと嘆いている人も実際存在する。留学期間が長ければ多少は誤差の範囲になるのかもしれないが、短期だったら住居探しに無駄に時間を取られることは致命的になるおそれがある。その点を十分注意して事前に色々準備すると良いと思う。

大学での生活

ヨーロッパの大学はエラスムス協定という学生交換留学協定を通じて学生の交換留学が盛んである。そのため学生の国際色が豊かなのは博士後期課程やポスドク研究員だけでなく、全体的にそういう傾向にある。日常的な国際交流が盛んなせいか留学生同士の交流の場も多い。学期期間中は毎週どこかしらで交流イベントが行われており、参加も気楽に出来るようになっている。私自身は研究の時間を失うのが嫌だったので交流イベントにはめったに参加しなかったが、「タンデム」という語学交流の場は活用していた。前述のようにチューリッヒは留学生のバラエティが豊かであり、また欧州の人は複数言語を喋れるのが当たり前なので新しい言語習得に対する関心も高い。「タンデム」とは、こうした特徴を活かし留学生同士で自分が習いたい言語ならびに指導できる言語を一斉にメーリングリストに流すことで自分の要望にマッチする相手を見つけるというシステムである。私もブルガリア人の交換留学生に



大学のテラスから撮影したチューリッヒの街なみ

日本語を教える代わりにドイツ語を教えてもらっていた。最初は先生と学生役がコロコロ変わっていくことに戸惑いながらも、慣れていく内に教えるのも教わるのもうまくなっていったと思う。私は読める文献の量を増やす上でも現地の文化を理解する上でも新しい言語を学ぶことは重要だと思う。特に現地で学べる機会はそうそう容易に手に入るものではない。そのために通常の語学の授業も受けていたが、どうしてもかゆい所に手が届かない時があった。「タンデム」ではそういうかゆい所に手が届く質問がしやすかったので、やってみて本当に良かったと思う。

スイス連邦工科大学チューリッヒ校に来てもう一つ良かったと私が強く感じるのは学科間の垣根が低いことである。前述の通り私は社会科学系の大学出身である。だから工科大学に進学したら社会科学系の大学では受講しづらかった数学や情報科学の授業を、もちろん自分の研究の邪魔にならない程度ではあるが、片っ端から受講していこうと思っていた。その点スイス連邦工科大学チューリッヒ校は最高の環境だった。元々学科間の交流が盛んなせいか、かなり専門性の高い授業でも他学科の学生にもわかるように親切に講義を行ってくれるのである。初歩的な質問をしても丁寧に教えてくれるし、自分の研究に関する相談をしてもいつも親切に助言してもらえる。また、研究に関しても異なる学科間でセミナーを開催したり共同で研究センターを設立することも決して珍しいことではない。自分のような学科間をまたぐ研究をしている者にとってこの環境は本当にありがたい。今後ともこうした恵まれた環境を活かし多くを学ぶとともに博士の学位取得に向け研究活動を積み重ねていきたい。

現状と今後の目標

スイスに留学してからちょうど1年、この1年間は本当に充実した日々を過ごせた。修士課程の際に執筆した論文も学術誌にて無事出版され、こっちにきてから着手し出した論文も早速一本完成させられた。留学する直前の頃は新しい国、新しい生活習慣、新しい指導教官のもとできちっと成果が出せるか不安で一杯だったけれども、最近それは杞憂だったなと笑い飛ばせる余裕も少しずつ出てきた。今後とも恵まれた環境で学び研究する機会を与えて下さったみなさんへの感謝の気持ちを忘れないようにしつつ博士号取得に向け日々の研究活動に励んでいきたい。また、今後はヨーロッパのど真ん中にいるという地の利点を活かし、様々な国での研究発表活動も積極的に行っていきたいとも思う。この1年間はさすがに最初の1年目だったので研究室にこもってばかりいたが、成果もたまり出しているので研究発表活動を通じて様々な研究者から刺激を受けるとともにコネクションを広げていければと思う。最後に繰り返しになるが、私がこのレポートに書いたような充実した研究生活を送れているのは、留学生交流支援制度を通じて博士後期課程での研究生活を支えていただいているJASSOの方々、一橋大学大学院の方々、修士課程の頃の指導教官、現指導教官、そして家族など多くの人々の助力によってなりたっているものである。今後ともそうした人達への感謝の気持ちを忘れず、一人前の研究者になれるよう全身全霊で研究にますます精を出していきたいと思う。